

第21回アジア太平洋地域雑草学会に参加して

(財)日本植物調節剤研究協会 研究所 主査研究員 橋本 仁一

1. はじめに

2007年10月2日から10月6日までの5日間にわたり、第21回アジア太平洋地域雑草学会 (APWSS: Asian Pacific Weed Science Society) が、スリランカ民主社会主義共和国 (Democratic Socialist Republic of Sri Lanka) のコロンボ (Colombo) において開催された。植調協会では毎回ツアーを企画し、今回も当協会の技術顧問である野口勝可団長を筆頭に、総勢18名が参加することとなった。このツアーでは、2007年9月29日から10月6日まで8日間の日程で、APWSSへの参加のほか、現地の農業事情を知るため、農業試験施設の見学や、農業生産に関わる場所について、各地で調査を行った。私も、今回のツアーに参加したので、その状況を以下に報告する。

2. インド洋の島国スリランカ

9月29日、私たち一行はスリランカに向け日本を後にした。“スリランカ”，現地語で「光り輝く島」という意味のその国は、日本の南西約7,500 km、インド亜大陸の南洋上にポーク海峡を介して存在する島国であり、かつてはセイロンという名で呼ばれていた。人口は約1,990万人。国土の面積は6万5,607 km²で、北海道より2割ほど小さい。

気候は、低地では熱帯気候で年間の平均気温

が27℃程度、中央の丘陵地は比較的涼しく平均気温は16℃程度とのこと。また、西部、南部地域はウエットゾーンに区分けされ、5月から7月にかけての南西モンスーンと、12月から1月ごろの北東モンスーンの影響により、2回の雨期が訪れるとのことである。一方、北部と東部はドライゾーンに区分けされ、雨期は北東モンスーンによる1回だけであり、それ以外の時期は降雨が少なく、乾燥しているようだ。

首都はスリー・ジャヤワルダナプラ・コッテ (Sri Jayawardenepura Kotte)。1985年にコロンボより国会議事堂を移転し遷都したとのことだが、政府機関の多くはまだコロンボに残っ

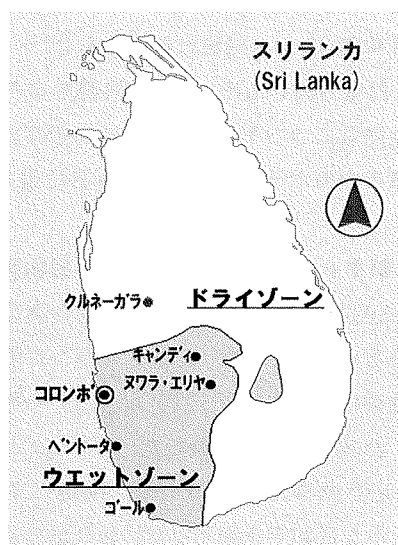


図-1 スリランカ地図



写真－1 コロンボ市街

ており、事実上はコロンボが首都といっても良いようである。

主な輸出農産物は天然ゴム、ココナッツ、紅茶で、特に紅茶は“セイロン・ティー”として世界的に有名である。また、主食は米で、それにスパイスの効いた様々なカレーを混ぜ合わせて食し、食後はミルクとたっぷりの砂糖を入れた紅茶を飲むのが、スリランカにおける食事の基本らしい。

日本を発ってからおよそ9時間、スリランカのバンダーヤーナラカ空港に着いたのは、現地時間の午後7時30分頃であった。日本との時差は3時間30分。気温は夜間でも27～28℃あり、湿度も高いため、飛行機を降りるとムッとした熱気につつまれた。この日はそのままコロンボ市内のホテルに向かい、翌日に備えた。

3. 古都キャンディ・ペーラデニア植物園

9月30日、日曜日を利用して現地の調査などを行うために、私たち一行はスリランカ中央の丘陵地帯にあるキャンディ (kandy) の町を目指し、バスで移動を開始した。「アーユボワン」、走り始めたバスの中で、現地ガイドのニュートン氏が手を胸元で合わせながら私たち

に挨拶した。現地語のシンハラ語で“おはよう、こんにちは、こんばんは、さようなら”を意味する。万能な挨拶ことばである。

スリランカに高速道路はない。コロンボからキャンディまでは約120 kmだが、到着までには途中休憩をいれて4時間ほどを要した。その間、ガイドのニュートン氏は車窓をすぎる町や建物の解説をし、スリランカの習慣なども丁寧に話してくれた。見慣れない異国の町並みへの好奇心もあって、キャンディまでの車中は飽きることがなかった。

途中、カシュウナッツ村で小休止し、キングココナッツの果汁を飲んだ。黄金色に輝くココヤシの果汁は、ほんのりと甘く、渴いた喉にはぴったりであった。

また、ワラカポラという場所で、地元の稲刈り作業をみることができた。柄が短く、刃が大きくカーブしたカマを使い、一枚の田んぼを7～8人がかりで稲刈りしていた。みると、稲は丈の中ほどで刈っている。そうしておいて後に水牛を放してやれば、高く刈り残した稲株を食べながら、水牛がくまなく田んぼを歩き回るので、自然と耕起が行われるのだそうだ。

作業を行っていた人たちは、田んぼの持ち主の親類らしい。休日にはみんなが無償で収穫を



写真－2 現地の稲収穫の様子

手伝い、手伝ってもらった家では食事と酒を振舞って、楽しく仕事を終えるのがスリランカの習慣だと、ガイドが話してくれた。

午後2時、ようやくキャンディの町に到着した。やや遅めの昼食のあと、郊外にあるペーラデニヤ植物園(Peradeniya Botanical Gardens)へと向かった。スリランカでも有数の植物園とのことで、総面積は5.6 km²もあり、植物の種類も4,000種を超えるとのことである。

私たちは南国の樹木や草花をみながら、園内を回った。特に目を見張ったのは、高さが40m以上はあるのではないかとされる“ウパス・ツリー”(樹液が矢毒の原料にもなるらしい)や、幹の直径が3m以上もある“ナンヨウスギ”、「この木、なんの木・・・」の歌でもお馴染みの“ジャンボ・ジャワ・ウィロー”などの巨木である。日本であればこれほど巨大に育つであろうか?環境が大きく異なるのだなと深く感じた。そのほか、“双子ヤシ”やロウソク状の長細い実をつける“ロウソクノキ”などの珍しい樹木もみることができた。

植物園での見学を終えたあと、夕方、キャンディの町中にあるマーケットと仏歯寺へ向かった。キャンディは、スリランカ最後の王朝であるシンハラ王朝が、インドからの侵入者に追わ

れて南下を続けた末にたどり着いた、周囲を山々に守られた要害の地であるらしい。王朝は19世紀前半にイギリスによって滅ぼされるまで、300年以上もこの地で栄えたという。その後イギリス人はこの地を避暑地として開発したとのことだ。キャンディの町のゆったりとして落ち着いた雰囲気は、そのような歴史的背景からくるようである。

キャンディのマーケットは、中央が吹き抜けの2階建てビルである。1階は、果物、野菜、米、肉、魚、香辛料などの食品売り場であり、2階はサリーと呼ばれる民族衣装や洋服、靴やバッグ、文具やおみやげ物の店が並んでいた。マーケットの中は混雑していても活気にあふれ、この土地の人々のたくましさを象徴しているようであった。

次に、マーケットから600m程の距離にある仏歯寺へと向かった。キャンディ湖畔にたたずむこの寺は、仏陀の歯を祀る由緒ある寺院である。以前、爆弾テロがあったとのことで、入場までには厳重なチェックを受けたが、仏陀の歯を納めているという金色の箱を、全員、わずかの間ではあったが目にすることができた。

スリランカでは国民の69%が仏教徒(他はヒンズー教、イスラム教、キリスト教など)とのことで、この日も日暮れ時刻にもかかわらず、寺院の中には多くの地元参拝者であふれており、熱心な信仰ぶりが伺えた。

寺院を出るとキャンディのホテルへ移動し、2日目を終えた。

4. ヌワラ・エリアの紅茶産地

翌日、キャンディを出発した私たち一行は、ヌワラ・エリア(Nuwara Eliya)という高原地帯の町に向かった。目的は、スリランカの主

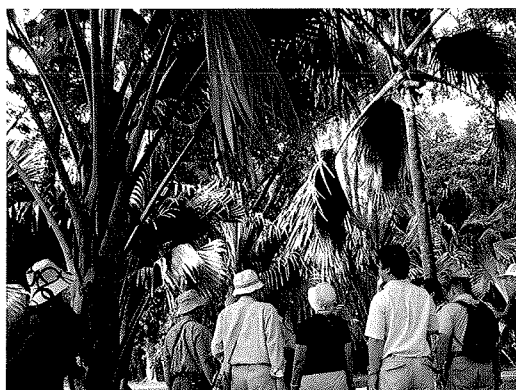


写真-3 ペーラデニヤ植物園

要農産物である紅茶の産地を見学するためである。その地はセイロン・ティーの本場であるという。

そもそも、スリランカでの本格的な紅茶栽培は、1867年スコットランド人のジェームス・テイラーによってはじめられたそうである。その後、紅茶生産者も増え、1890年には茶畑は8.9万haに拡大。以降も茶畑は増え、1900年には15.5万ha、現在では22.2万haにも達するとのことだ。

キャンディの南に位置するヌワラ・エリアまでの距離は、地図上では直線で35km程度と近く見える。しかし、キャンディが標高500m程なのに対し、ヌワラ・エリアの町は標高1,800mを越える場所にある。途中バスを降りる機会があったが、やはりキャンディより涼しい。曲がりくねった道を行くので、目的地到着までには、やや時間を要した。

山肌を沿うように走って行くと、徐々に茶畑が見えてくる。山の斜面はけっして緩やかではないが、茶畑は整然と並んでいて、所々では滝の流れも見られる。とても清々しい風景であった。途中、茶摘みをしている女性達の姿も見ることができた。

午前10時頃、ヌワラ・エリアの紅茶工場である、ラブーケリー・ティー・センター(Labookellie Tea Centre)に到着した。この工場は、ヌワラ・エリアでも屈指の紅茶工場で、茶葉の収穫から箱詰めまでを行っているとのことである。私たちは、工場内を案内してもらいながら、作業工程について説明を受けた。

ガイドによれば、茶葉は一芯二葉(芯とその下2枚の葉のみ)を摘み取り、その後、重さが半分になるまで工場内で通風乾燥させるそう。次に揉捻を行い静置すると、茶葉が酸化発

酵し褐色に変化する。それをよく乾燥させると、一般に知られる黒みがかった縮んだ茶葉になるとのことだ。更にそれを、大きさによって選別し箱詰めすれば、製品が完成するとのことであった。なお、お茶の木は5年毎に剪定を行い、25年毎に植え替えを行うという説明であった。

また、ガイドによれば、茶園で茶摘みなどの作業に従事する多くの人は、インドからそのために連れてこられたタミール人で、ラインと呼ばれる長屋に住み、貧しい生活を送っているのだという。

工場の敷地内には、出来たての紅茶を試飲できるカフェと、紅茶の売店がある。私たちは、しばし本場のセイロン・ティーを味わい、製品の紅茶をお土産に購入して工場見学を終えた。

その後、ヌワラ・エリアの町にあるホテルで昼食をとった。このホテルは、ザ・グランド・ホテルという、100年以上もの歴史をもつ由緒あるホテルで、スリランカがイギリス植民地であった頃に建てられたものらしい。この地もまた、イギリス人達の避暑地として栄えた町なのだろう。

昼食をすませると、私たちは次の目的地へ向かうため、高地を後にしてキャンディへと戻った。

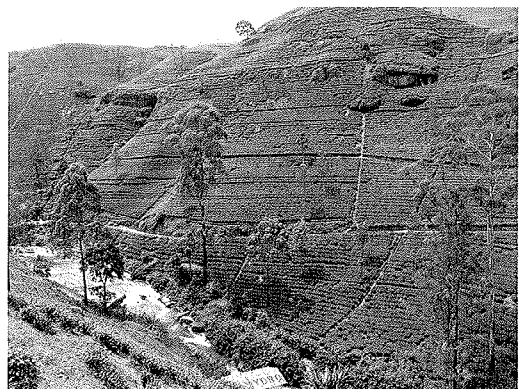


写真-4 ヌワラ・エリアの茶畑

5. 園芸作物研究普及所・農業技術公園

今ツアーの野口団長は、かつて熱帯農業研究センターの研究員であった頃、1987年4月から88年9月までの約1年半、スリランカ・キャンディの中央農業研究所(CARI)に駐在し、水稻に関する研究に従事されていた。現在でも、スリランカの状況に明るく、私も出発前から色々とおアドバイスを頂いていた。その野口団長の仲介により、今回見学が可能となった場所がいくつかある。ヌワラ・エリアの次に向かった園芸作物研究普及所(Horticultural Crop Research and Development Institute)と農業技術公園(Agro-technology Park)もそうであった。以前ここは野口団長が駐在しておられた、中央農業研究所(CARI)であったのだが、組織が変わり現在のようになったとのことだ。残念ながら野口団長が見知った方はいらっしやらなかったようだが、代わりに農業技術公園の責任者であるDr.Rohanが、試験場案内のため、私たちの訪問を待っていて下さった。

説明によれば、スリランカでは年2回の作物栽培シーズン(マハ作期とヤラ作期)があり、園芸作物の品種、育種試験を中心にを行い、病害や栽培に関する試験も一部で行われているという。試験圃場内では、インゲン、ダイズ、カン



写真－5 農業技術公園

ショ、ニガウリ、トマト、トウガラシ、ナス、ササゲ、ゴマ、トウモロコシ、シコクビエなど色々な作物で試験が行われていた。また、マメ科作物に発生する“イエローウィン”という、葉が黄化する原因不明の病気が、スリランカ国内で広がっており、対策に苦慮しているとのことであった。

農業技術公園内では、遺伝資源の保存・活用のため、川沿いのコースで野生種を育てており、イネ、オクラ、バナナ、マンゴー、パイン、カシューナッツ、ストロベリー、ニッキ、ピジョン豆などの野生種をみる事ができた。

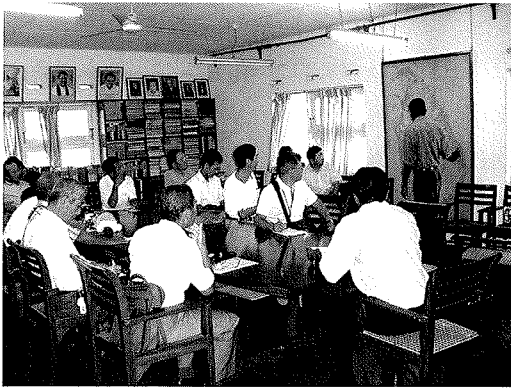
また、園内では果樹の試験、土壌流亡防止の試験、水稻の品種比較試験、水田の高度利用に関する試験が行われていた。その他、18㎡の面積に148種の作物を植えたホームガーデンや、スリランカの伝統的な農機具類を展示した農機具博物館も見学できた。

園内をくまなく案内してくださったDr.Rohanにお礼を述べ、私たちはホテルへと戻った。

6. 水稻研究普及所

翌朝8時、ホテルを出発した私たちは2時間後、キャンディから北西に20 km程離れたクルネーガラ地域のイッバガムワ(Ibbagamuwa)という町にある、水稻研究普及所(Rice Research & Development Institute)に到着した。ここも、野口団長の仲介で、見学させていただくこととなった施設である。

この研究普及所は20 haの敷地をもち、18名の研究員が勤務しているとのこと、水稻の収量、品質の向上、病虫害抵抗性を目標とした育種の試験を中心に、栽培や土壌肥料などの試験も行っているとの説明であった。所内の会議室に通された私たちは、研究所のWMW Weerakoon氏からス



写真－6 水稲研究普及所

リランカの稲作について話をうかがった。

説明によれば、スリランカの水田面積は70万haほどあり、作付けシーズンはやはり年2回で、メインシーズン（マハ期）は9・10月からで50万ha程を作付けする。また、マイナーシーズン（ヤラ期）は4月からとなり、30万ha程を作付けするという。これは、一度に全ての圃場で栽培を行うには、水が不足であるためとの話であった。

また98%が直播栽培であり、移植栽培はわずか2%であるという。直播では、籾を2日間水につけ催芽したあとに播種すると出芽率が良いとの話で、移植は苗4～5葉期で植えるのが一般的とのことであった。なお、ウェットゾーン（南部、西部）では、豊富な雨水による天水田が主だが、ドライゾーン（北部、東部）では、大小の灌漑施設により栽培を行っているとのことである。

スリランカの米は、炊くとパラパラとするインディカ米であるが、品種は主に生育期間によって区分されているとのことだ。説明によると、3ヶ月で収穫する品種、4ヶ月品種、5ヶ月品種などがあり、中には“Bg 250”という80日で収穫する品種もあるという。最も多く栽培されているのは3ヶ月品種で、全体の40%を占

めるという。平均的な収穫量は籾も含めた量で1ha当たり4t程、多いところでは8tもの収穫が可能とのことである。また、国全体の収穫量は年間380万tになるという。

また、スリランカ国民が1年間で消費する米の量は、一人当たりおよそ100kgとのことだが、米の自給率は95%で、残りをタイなどからの輸入に頼っているとの説明であった。栽培において問題になっている雑草は、コヒメビエ、コナギ、カヤツリグサなどの一年生雑草が多く、多年生雑草は比較的少ないとのこと。また、一般農家の90%は雑草防除に除草剤を使用しており、DCPA剤やノミニー（ビスピリバックナトリウム塩）液剤などが、よく使用されているとのことである。

現地水田で発生する雑草については、研究普及所でいただいたパンフレットを元に、宮城県古川農業試験場の吉田修一氏および、秋田県立大学の森田弘彦氏が調べられたものを、表－1として掲載した。また現地で使用されている水稲用除草剤についても、同パンフレットを元に、表－2にまとめた。なお、薬剤については日本で使用されていない成分のものも多い。

スリランカでは機械化はあまり進んでおらず、一般的な農家は収穫も主に手刈りで行っているとのことだが、ドライゾーンの大規模農家では、大型のトラクターやコンバインを使用しているとの話であった。ちなみに、一般農家の平均的な水稲栽培面積は50a程だそうで、そこから得られる収入は日本円にして、年間10数万円だという。

研究普及所での取り組みや、スリランカの水稲栽培事情を伺ったのち、別棟のサーキットバンガローで紅茶が振る舞われた。やはり、スリランカのティータイムは紅茶が定番のようだ。

表-1 スリランカ現地水田で発生が見られる草種

	学 名	和 名	発生の 多い草種
イ ネ 科	<i>Echinochloa crus-galli</i>	イヌビエ	○
	<i>Echinochloa colona</i>	コヒメビエ	○
	<i>Isachne globosa</i>	チゴザサ	○
	<i>Ischaemum rugosum</i>	タイワンアイアシ	○
	<i>Leptochloa chinensis</i>	アゼガヤ	○
	<i>Paspalum distichum</i>	キシユウスズメノヒエ	
カ ヤ ツ リ グ サ 科	<i>Fimbristylis dichotoma</i>	テンツキ	○
	<i>Fimbristylis miliacea</i>	ヒデリコ	○
	<i>Cyperus rotundus</i>	ハマスゲ	○
	<i>Cyperus iria</i>	ココメガヤツリ	
	<i>Cyperus difformis</i>	タマガヤツリ	
	<i>Scripus supinus</i>	ホタルイや コウキヤガラの間	
広 葉	<i>Eichhornia crassipes</i>	ホテイアオイ	○
	<i>Eclipta alba</i>	アメリカタカサブロウ 現地で見たものは別種 「タカサブロウの類」	
	<i>Ludwigia octovalvis</i>	キダチキンバイ	
	<i>Murdannia nudiflora</i>	シマイボクサ または「アヒルイボクサ」	
	<i>Monochoria vaginalis</i>	コナギ	
	<i>Sphaeranthus africanus</i>	タマバナソウ	
	<i>Aeschynomene indica</i>	クサネム	
	<i>Sphenoclea zeylanica</i>	ナガボノウルシ	
	<i>Limnocharis flava</i>	キバナオモダカ	
	<i>Commelina diffusa</i>	シマツユクサ	
	<i>Marsilea minuta</i>	「デンジソウの類」 現地で見たものは別種 ナンゴクデンジソウ	
	<i>Salvinia molesta</i>	オオサンショウモ	

表-2 スリランカで使用されている水田除草剤

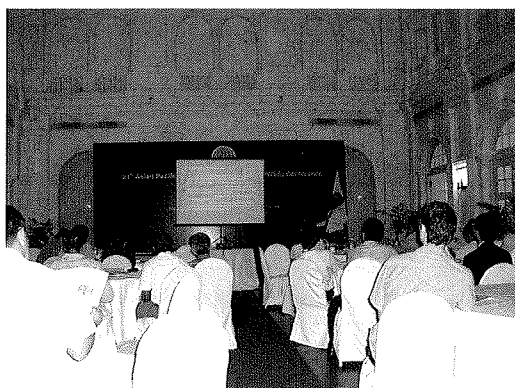
処理時期	水稲で使用されている主な除草剤
イネ播種前	パラコート剤 グリホサート剤
イネ播種後・出芽前	oxyfluorfen剤 プレチラクロール+フェンクロリム混合剤
イネ2～4葉期	ノミニー(ビスピリバックナトリウム塩)液剤 フェントラザミド+DCPA混合剤 オキサジアゾン+DCPA混合剤
イネ2～4葉期 (イネ科雑草対象)	DCPA剤 キンクロラック剤 clomazone+DCPA混合剤 シハロホップブチル剤 ペンディメタリン+DCPA混合剤 チオベンカルブ+DCPA混合剤
イネ3～6葉期 (イネ科雑草対象)	フェノキサプロップエチル剤
イネ3～5葉期 (広葉雑草対象)	MCPA剤 2, 4-D剤 MCPA+2, 4-D混合剤 エトキシスルフロン剤 シクロスルファミロン剤

水稲栽培について詳しく説明してくださった、研究普及所の方々にお礼を述べ、私たちはコロンボの学会会場へと向かった。

7. 学会講演会

ゴール・フェイス・ホテル (Galle Face Hotel)。インド洋に面した海岸沿いに、イギリス植民地時代の1864年に建てられた、伝統と格式高いホテルが、今回のAPWSSの会場である。

10月2日、会場に着いた私たちは受付をすませ、会場パスと大会資料を受け取った。この日は、午前中に大会代表者らの挨拶と本会議 (Plenary Session) を、午後からは専門分科会



写真－7 学会講演会

(Technical Session) が予定されており、私たちは各々席について講演を聴いた。

夕方からは、同ホテルにおいて歓迎レセプションが行われた。講演会なども行われる大きなホールで食事をとりながら、日本から参加されている他の方々と、挨拶を交わすことができた。

翌10月3日、大会2日目であるこの日は、午

前9時から本会議がはじめられ、会場のメインホールにおいて、3名の方による講演が、それぞれ30分ずつ行われた。そこでは、農業環境技術研究所の藤井義晴氏による、「外来植物のリスク評価とそれら植物の制御－日本の国家プロジェクトの報告－」と題した、日本におけるプロジェクトの活動を紹介する講演などもあった。

今回の会議には19の国と地域から189名の参加者があり、5日間（内1日はフィールドツアー）の日程中、26の専門分科会（Technical Session）が開かれ、133もの講演が行われていた（表－3参照）。講演会場は3つ用意されており、1人当たりの報告時間は質問時間も含め20分であった。私も会場を移動しながら、講演を聴いてまわったが、中には開始時間になっても講演者があらわれず、発表がなされないというハプニングもあったようだ。

この日は、ポスターセッションが行われる日

表－3 専門分科会（Technical Session）のテーマ

月 日	専門分科会	テ ィ マ	報告数
10月2日	Session 1	Molecular Biology and Biotechnology (分子生物学とバイオテクノロジー)	3
	Session 2	Non Chemical Weed Management Strategies (化学的手法以外の雑草管理戦略)	4
	Session 3	Allelopathy (アレロパシー:他感作用)	4
	Session 4	Herbicide Resistant Weeds & Their Control (除草剤抵抗性雑草とその制御)	4
	Session 5	Weeds & Weed Control in Perennial Crops (多年生農作物での雑草とその雑草防除)	4
	Session 6	Allelopathy (アレロパシー:他感作用) ※Session3と同じ	4
10月3日	Session 7	Herbicides surfactants and impact of chemical weed control on the environment (環境における除草剤界面活性剤と化学的雑草防除の影響)	4
	Session 8	Invasive plants, their spread and control (侵略的植物、その拡散と管理)	4
	Session 9	Integrated Weed Management (統合的雑草管理)	4
	Session 10	Poster Session (ポスター発表)	25
	Session 11	Herbicides surfactants and impact of chemical weed control on the environment (環境における除草剤界面活性剤と化学的雑草防除の影響) ※Session7と同じ	5
	Session 12	Alien invasive plant, their spread and control (外来の侵略的植物、その拡散と管理)	5
	Session 13	Integrated Weed Management (統合的雑草管理) ※Session9と同じ	5
10月5日	Session 14	New herbicide and pre-mixed formulations (新しい除草剤と混合製剤)	4
	Session 15	Parasitic weeds and weedy rice (寄生雑草と雑草イネ)	4
	Session 16	Uses of weeds and allelopathic crops (雑草とアレロパシー的農作物の使用)	4
	Session 17	Herbicide Application Technologies (除草剤応用技術)	4
	Session 18	Weed diversity and seed bank dynamics (雑草多様性とシードバンクの変遷)	4
	Session 19	Extension and Education (伸長と育成)	4
	Session 20	Efficacy of herbicides (除草剤の効果)	5
	Session 21	Weed-crop competition (雑草と農作物の競合)	4
	Session 22	Allelopathy and biological control of weeds (アレロパシーと雑草の生物学的管理)	5
	Session 23	Impact of Herbicides (除草剤の影響)	5
10月6日	Session 24	Weed Biology (雑草生物学)	5
	Session 25	Impact of Herbicides (除草剤の影響) ※Session23と同じ	5
	Session 26	Weed Management in non-crop areas (非農耕地での雑草管理)	5
合 計			133

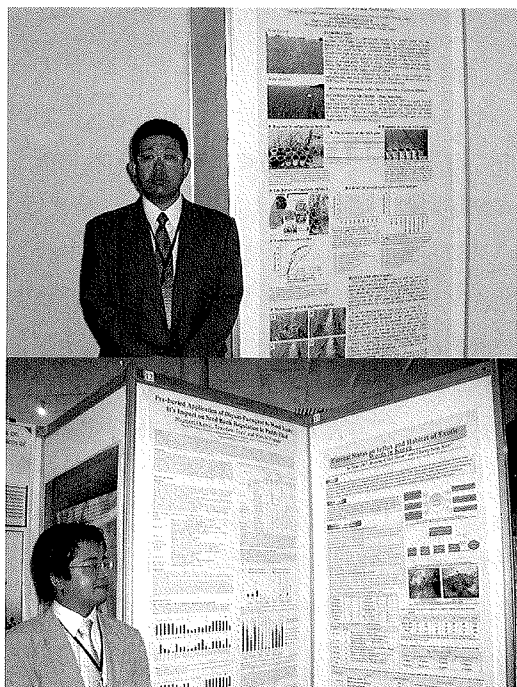


写真-8 ポスター発表

でもあった。ツアー参加者の中からは、宮城県古川農業試験場の吉田修一氏と、同試験場の大川茂範氏が各々エントリーされており、お二人とも朝から準備に余念がないといった様子であった。なお、吉田氏は、「スルホニルウレア抵抗性バイオタイプのオモダカに対するベンゾフェナップの除草剤有効性」について、大川氏は、「雑草種子へのジクワットーパラコート混合剤の埋土前処理（水田圃場のシードバンク制御への影響）」という内容での発表であった。また、ポスターセッションが行われていた会場には、クミアイ化学工業株式会社と、オパックス社のブースも設けられていた。クミアイ化学では、ノミニー（ビスピリバックナトリウム塩）液剤という、日本では主に直播水稻で用いられている薬剤を、スリランカにおいて10年前から販売しているとのことだ。

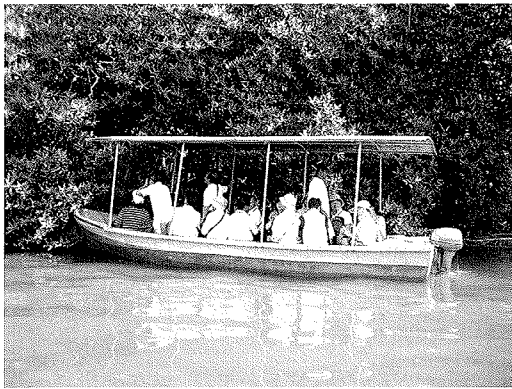
前述したとおりスリランカでは直播栽培が多

く、実際、水稻研究所の方も、国内でよく使用されているとの話をされており、使用実績も良いようである。今大会では、同社生物科学研究所の小林正典氏が、「イネに対するビスピリバックナトリウム塩+チオベンカルブ915OD (15+900ga.i./l oil dispersion) の生物学的性能」というテーマで、講演も予定されていた。

8. 学会ツアー・ベントータ河、城塞都市ゴール

大会3日目には、学会主催のフィールドツアーが行われた。ツアーは2コースあり、1つはキャンディー、ペーラデニアをまわるツアー、もう一つはベントータ（Bentota）へ向かうツアーである。私たち一行は、ベントータ・ツアーに参加した。ベントータはコロomboの南61 km程に位置する場所で、スリランカを代表するビーチリゾートでもある。町のあちこちには、設備の整ったリゾートホテルが並んでいる。すぐ側を、大きなベントータ河が流れており、河を挟んだ隣はアルトゥガマの町となる。そこは一般庶民の町で、ベントータとは趣を異にしている。

私たちは、ベントータ河をさかのぼるクルーズを体験することとなった。船着き場にあらわれたのは、15人ほどが乗れる小さな船が2隻。私たちは二手に分かれて船に乗り込み、河をゆっくりとさかのぼった。川辺にはマングローブ林があり、ヒルギ科の樹木が生い茂っていた。日本であれば、沖縄でしか見られない光景である。また、体長2 mもあるオオトカゲや、ワニ、緑色のヘビ、珍しい鳥など、そこに棲む様々な生き物も見ることができた。特にオオトカゲについては、人が住むすぐ近く、というより人間の生活エリアの中で普通に活動していることに驚いた。



写真－9 ペントータ河のクルーズ

1時間ほどクルーズを楽しみ、私たちは元の岸へもどった。その後、ファーム・ホテルというリゾートホテルに移動し昼食を済ませた後、コロンボへと戻った。

最後に立ち寄った、ゴール (Galle) はコロンボから南に120 km下がった、スリランカ南部最大の町である。旧市街はインド洋に突きでた半島で、周りを砦で囲まれている。かつては城塞都市として植民地支配の重要な拠点であったとのことだ。町中には、教会やモスク、西洋的な建物が多い。

2004年の年末、インドネシア・スマトラ島沖を震源とする大地震により、スリランカは大きな津波に襲われた。特に南部は大きな被害を受けた。ゴールの町においても、砦の外にあるバスステーションを中心に、1万人以上もの犠牲者が出たという。しかし、砦の中では被害は少なく安全であったとの話だ。かつて戦いから町を守るために築かれた砦は、津波からも町を守ったのだ。

ゴールから少し戻ったヒッカドという町のホテルで食事をとると、コロンボへ引き返しホテルをチェックアウトして、私たち一行は日本への帰途についた。

9. おわりに

今回のツアーは実のところ、私にとって初めての海外経験であり、そのため日常的な場面でも驚かされることがたくさんあった。例えば、バスで移動している時には、後ろからクラクションを鳴らしながら、乗用車はもちろん市内バスや、スリーウィーラーと呼ばれる3輪車までが、追い越しをしてきたり、横から強引に割り込みをしてきたりして、あわや衝突するという場面がたびたびあった。日本人の私にはとても危険に感じるのだが、現地人のバス運転手はあわてる様子もなく、逆に強引な追い越しをしたりして、冷や冷やした。

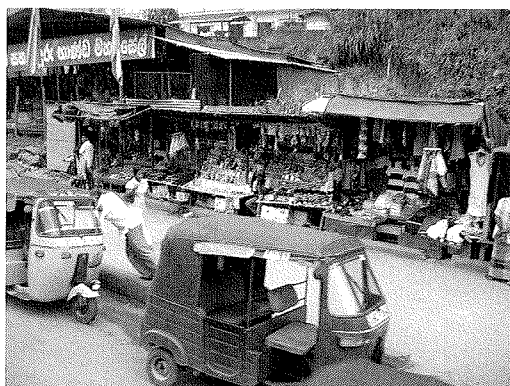
また、治安に関しては私たちが行動した地域はどこも平穏で、現地の人々も人当たりが良く、危険を感じるようなことは無かったのだが、それでも要所要所には銃をたずさえた軍隊や警察官が検問に当たっており、日本との違いを肌で感じる光景であった。

以上の様な事柄も含め、今回のツアーで得たものは、学会への参加や農業試験施設見学および現地の調査などを通じて、非常に多かったと感じている。また、ツアー中は終始なごやかな雰囲気でも過ごせ、トラブルもなく、ほぼ予定通りの日程をこなすことができた。

これもひとえに、ツアーご参加の皆様のご協力と、学会関係者の方々、訪問先で案内して下さった研究員の方々、そして添乗員・現地ガイドの方々のお陰であり、紙面を借りて深く感謝を申し上げたい。



写真－10 ゴールの砦



写真－11 道沿いの様子



写真－12 学会フィールドツアー／ベントータのホテルにて